

第2回（仮称）

第3次都心まちづくり計画検討会

議 事 録

日 時：2024年9月17日（火）午前10時開会
場 所：札幌市民交流プラザ 2階 SCARTSスタジオ1・2

1. 開 会

○事務局（伊関都心まちづくり課長）

定刻より若干早いですが、ただいまから、第2回（仮称）第3次都心まちづくり計画検討会を開催いたします。

本日は、お忙しい中をご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

私は、事務局の札幌市まちづくり政策局都心まちづくり推進室の伊関と申します。本日は、どうぞよろしく願いいたします。

それでは、まず初めに、配付資料の確認をさせていただきます。

お手元に配付いたしました資料は、次第、資料1の座席表、資料2の（仮称）第3次都心まちづくり計画検討会委員名簿、資料3の第2回検討会資料、資料4の市民・来街者意向把握調査 調査結果報告書の速報版、資料5の第一部会資料、資料6の第二部会資料、最後に、情報提供といたしまして、9月18日から行われます道庁南の社会実験のパンフレットをおつけしております。

以上ですが、皆様、不足はございませんか。

それでは、ここで、本日が初回のご出席となります委員の皆様をご紹介させていただきます。お名前を読み上げますので、ご着席のまま、ご一礼をいただければと存じます。

札幌商工会議所総務委員会委員長、池田食品株式会社代表取締役社長の池田光司様です。

日本政策投資銀行北海道支店次長の三浦幹央様です。

札幌商工会議所都市・交通委員会委員長、北都交通株式会社代表取締役社長の渡邊克仁様です。

本日、オンラインにてご出席いただいております札幌市立大学デザイン学部准教授の片山めぐみ様です。

最後に、今回からオブザーバーとしてご参加いただいております北海道石狩振興局地域創生部部長の矢野敦子様です。

なお、本日、三井不動産株式会社北海道支店支店長の東幸治様はご都合によりご欠席のため、北海道支店次長の鹿島健太郎様に代理でご出席いただいております。

続きまして、事務局として、札幌市都心まちづくり推進室、業務受託者である株式会社ノーザンクロスが出席しております。

なお、報道各社におかれましては、この後の写真・映像等の撮影はご遠慮いただきますよう、お願いいたします。

また、本日の検討会につきまして、個人に関する情報など非公開情報を除き、会の次第、出席者氏名、発言者等を記載しました議事録を作成し、公表いたしますので、ご了承ください。

それでは、村木座長に以降の会議の進行についてお願いしたいと存じます。

村木座長、よろしく願いいたします。

2. 第2回検討会資料説明

○村木座長

おはようございます。本日も活発な議論をどうぞよろしくお願いいたします。それでは、早速、議事に入ります。次第に従いまして、事務局から資料のご説明をお願いいたします。

○事務局（杉原推進担当係長）

都心まちづくり課の杉原です。

それでは、お手元の配付資料3又は画面をご覧ください。なお、委員の皆様は事前にお送りした資料より文言を若干修正している箇所がございますので、あらかじめご了承ください。

まず、本日の目次ですが、最初に前回の検討会と二つの部会について振り返りをさせていただきます。また、市民・来街者を対象にしたアンケート調査を実施いたしましたので、簡単に概要をご報告させていただきます。3番以降は、本計画の骨子案の一部を提示させていただきます。

おめくりいただき、2ページ目をご覧ください。お示しする案に対し、論点ごとにご意見を頂戴できればと思います。

それではまず、3ページをご覧ください。

検討会と部会の振り返りとなりますが、改めてスケジュールをお示しいたします。この検討会本体は、6月に第1回を実施いたしました。そこで立ち上げた二つの部会も既に1回目を実施しました。今後は、部会の2回目、3回目を行った後、2月から3月頃に本検討会本体の第3回を実施したいと考えております。

それでは、4ページをご覧ください。6月6日に開催しました第1回検討会にて頂戴した意見をまとめております。前回は、今後20年で都心の将来像を描くのに必要な視点という広いテーマで、様々な切り口からご意見をいただきました。

その中でも、都市開発と産業政策とを両輪で取り組むべきといった札幌、北海道の経済を牽引していく都心の役割に着目したご意見が多かったように思います。大学との連携、社会実験の受入れ、人が交流する機能など、都心でイノベーションを創出するための仕掛けについても言及がございました。

続いて、5ページをご覧ください。人口減少や気候変動などの変化の中で、都心のまちづくりが担っていくべきポイントについてもご意見をいただいております。また、実効性のある計画にするために必要な視点として、分野別の取組だけでなく、横串を刺し、相乗効果が見えるようにしないといけないというご意見は今後も意識して検討してまいりたいと考えております。

続きまして、6ページをご覧ください。第1回では、こちらに記載の二つの部会を設置し深掘りしていくことを承認いただきました。

次の7ページ、8ページでは、第一部会、居心地が良く歩きたくなる都心まちづくり検討部会のご報告を簡単にまとめております。第1回は8月29日に実施いたしました。委員の皆様には会議資料を配付しておりますが、まだ議事録はまとめておりません。でき次第、共有させていただくほか、ホームページで公開させていただきます。

7ページ資料左から検討の視点までは、札幌市から提示しました論点になります。

委員の皆様からは、居心地が良い景観があり、変化が感じられることで様々な行動が生まれるという魅力的なストリートの形成に必要な視点ですとか、交通機能については、バスの乗降場や荷さばきの機能の確保、渋滞対策なども必要といった意見をいただきました。

8ページでは、人と人の交流が生まれるようなちょっとした仕掛けがあると良いですとか、空間の活用だけではなく、交通、制度、マネジメントなどの視点でバランスよく考えていくことが重要といったご意見がありました。

続きまして、9ページからは、第二部会、都心の脱炭素化に向けたエネルギー施策検討部会の概要となります。こちらは、7月29日に1回目を開催しまして、会議資料を配付しているほか、議事録はホームページにて公開しております。こちらでは、CO₂排出削減目標の見直しに対し、現在できていること、足りていないことを整理する必要がある、三つの対策のバランスを取る必要があるといった今後の検討のポイントを提示いただいております。

次の10ページ、左下ですが、都心まちづくり計画と都心エネルギーマスタープランの統合についてはご賛同をいただいたところですが、プランを見る方々の視点に立ち、分かりやすさを考えて取りまとめていくということは肝に銘じて今後進めていきたいと思っております。

それでは、11ページをご覧ください。ここからは、7月に実施しました市民・来街者意向把握調査について、簡単に共有させていただきます。委員の皆様には、お手元の配付資料に詳細版を配付しておりますので、後ほどご覧いただければと思います。

概要としましては、都心の利用実態や、都心への評価・ニーズを把握するため、実施したものです。今回は、対象者を都心で働くワーカーと今後を担う高校生、大学生に絞って実施いたしました。特徴的な点としましては、右のグラフQ3をご覧ください。これから重視していくべきまちづくりについて聞いたところ、災害に強いまちへの関心が高くなっております。また、誰もが快適に移動しやすいまち、歩いて楽しい、歩きたくなるまちへのポイントも高い傾向が見てとれます。

次のページをご覧ください。続きまして、国内からの来街者と国外からの来街者を分けて実施したものです。Q1では、国内の方よりも国外の方のほうが、公園・広場の滞在や散策など、まちそのものを楽しむ活動が多いという特徴が見られました。

これらアンケートの結果は、分析をしながら今後の検討に活かしてまいりたいと考えております。ここまでがご報告、情報共有のパートとなります。

続きまして、13ページをご覧ください。ここから一つ目の論点となります計画構成案についてご説明させていただきます。今回検討いたします新たな計画では、まちづくりの理念、目標を定めます。目標には成果指標を設定することを想定しています。

また、まちづくりを支える都心の構造を位置づけ、それを前提として目標実現に向けた基本方針と重点戦略を定めます。都心の構造に基づいた空間形成指針も盛り込んでいきたいと考えています。

この黒枠までが計画本書を想定しており、具体の取組、施策については、社会情勢の変化や進捗に応じて柔軟に対応できるよう、仮称となりますが、中期アクションプログラムとして別冊で整理したいと考えております。

14ページをご覧ください。先ほどの構成案を基に、実際の計画の目次に近い形で整理したものです。今回の議論は3章までということになります。具体的な取組の方向性については、この後の部会の議論などを踏まえて、次回、第3回でお示ししていきたいと思っております。

論点1としまして、この計画構成の枠組みについてご意見をいただきたいと思っております。

続きまして、15ページをご覧ください。ここから、章立てに沿って骨子案をお示しいたします。まずは序章ということで、二つの計画を統合する趣旨についてまとめております。現状の計画では、対象区域の違い、取組の重複、別々の進行管理が行われているといった課題がありました。計画を統合することで、都心まちづくりの統合性と一体性を確保、強化するほか、重点戦略を明確化し、進行管理の一体化により実効性を確保することを狙いとしています。

16ページをご覧ください。計画の目的、位置づけについて整理しています。計画策定の目的、どのようにこの計画を活用していくかにつきまして、まずは長期的なビジョンを明確化し、市民や事業者と共有したいと考えています。また、そのビジョンを都心の魅力発信のツールとしても活用したいという狙いもあります。

二つ目には、公民が連携してまちづくりを進めていく糸口になるよう、取り組み方を整理してお示しすることで、計画の実行性を確保することを考えています。

計画対象区域については、現行のエネルギープランの区域とは異なりますが、札幌市の最上位計画である第2次まちづくり戦略ビジョンに示された範囲といたします。なお、ひし形の外側にグラデーションが広がる表示としておりますが、これは周辺の取組であっても連携により都心の機能強化につながるものは柔軟に対応していくことを示しております。

17ページをご覧ください。ここからは、都心まちづくりの現状と課題を整理しております。前回お示した内容と重複しますので説明は割愛しますが、下の段の緑の枠でキーワードを抽出しています。このページでは、まず現行計画の振り返りから、これまでも取組み、今後もさらに強化していくべき事柄を挙げています。

18ページをご覧ください。次に、社会経済情勢の変化から同様にキーワードを抽出し

ています。

それらをまとめたものが19ページになります。ここでは、平成28年の第2次計画策定後に起きた社会の変化と、前段で抽出した課題や各検討会で出た意見などから導き出された、これから取り組んでいくべき課題がありながらも、変化する環境に柔軟かつ機動的に対応し、将来につながるまちづくりを着実に進めることが必要である、そのために今新たな計画が必要であるということを掲げております。

20ページをご覧ください。ここからが二つ目の論点となります新たな計画の最上段にくる理念についてご提案いたします。これまでの計画では、世界目線と市民目線、二つの視点から目標を立てていました。次の計画でもこの考え方はぶれずに踏襲いたしますが、何を基本にし、どんな方向性をもって都心まちづくりを進めていくのかという基本的な考え方を示すものとして理念を位置づけるとともに、より明快で共有しやすいものを設定したいという思いから、「世界が憧れ、市民が誇れる、札幌・北海道の都心」というフレーズに再整理したいと考えております。

込めた思いについては下の段に記載しておりますが、市民目線と世界目線でそれぞれ高め合うことが互いに好循環になっていくことを理想としていることも示しております。

この理念に基づいた都心まちづくりの目標を21ページにお示しいたします。目標を三つ提案いたします。目標1「多様なひと・もの・ことが集まり新たな産業・文化・交流がうまれる都心」、目標2「四季を通じて居心地がよく歩きたくなる都心」、目標3「気候風土に即した先進的な脱炭素化・強靱化の取組が進む都心」です。各目標は、別個に考えるのではなく、相関関係を意識しながら具体的取組につなげていきたいと考えています。また、目標を達成するために、これら目標にそれぞれ指標の設定を検討するほか、計画の実効性を高める仕組みと推進体制を構築することも併せて考えてまいります。

今回の論点2としましては、これら提示しました理念・目標案について率直なご意見をいただきたいと思っております。

また、22ページをご覧ください。ここでは、目標案を導き出すに当たって、前段で整理した課題との対応関係についてお示ししています。

これまでの取組や今後の方向性として例示している中身は、今後、検討の上、深めていくこととなりますが、1回目が出た意見などを踏まえて要素を盛り込んでおります。このほかに付加すべき要素、三つの目標で受け切れていない要素などについてもご議論いただきたいと思っております。

続きまして、23ページをご覧ください。話が変わりますが、都心の構造についてご説明させていただきます。まず、これまでの計画において、まちづくりを進める上でよりどころとなる要素として、骨格構造とターゲットエリアを設定していることを紹介しております。

骨格構造につきましては、24ページをご覧ください。都心における様々な取組を促進するための基軸として、四つの骨格軸と一つの展開軸を位置づけています。また、その交

点かつ交通結節点は、多様な機能、活動の集積が見込まれ、まちづくりを先導するところとして、二つの交流拠点に位置づけているところです。ここでは、第2次都心まちづくり計画の期間中の主な取組成果についても整理しています。

25ページをご覧ください。骨格軸や交流拠点の形成を戦略的に展開するために、面的な広がりでもまちづくりを展開すべき地区としてターゲットエリアを定めています。面的なまちづくりが展開されているところがある一方、色が塗られていない、位置づけがないエリアで開発を検討するときに誘導方針が明確でないという課題も顕在化しているところです。

26ページをご覧ください。ほかの関連計画において都心の位置づけがあるものを参考までに提示しております。

続いて、27ページをご覧ください。近年の動向としまして、左側、中島公園駅周辺地区と大通公園西周辺エリアでは、市が関与しながらまちづくりガイドライン策定に向けて検討を行っています。右側については、民間事業者の発意により、ビジョンなどの検討やまちづくりの取組が進められているエリアが次々出てきていることを紹介しております。

28ページをご覧ください。これらの動きを踏まえまして、次の計画における都心の構造案をお示しいたします。これが論点3になります。

左の構造の要素ですが、ここでは従来のターゲットエリアとは異なる位置づけを考えております。まず、骨格構造のほか、地域特性を踏まえたゾーンをベースレイヤーとして設定したいと思います。その上に、取組・戦略ごとに重点的に展開するエリア設定をアクションレイヤーとして重ねていく方式としたいと考えています。

例えば、現状のターゲットエリアのうち、都心強化先導エリアは業務機能の高次化を集中的に展開するとしておりましたが、それは機能誘導の視点のレイヤーで整理されることが考えられます。一方、歩きたくなるまちづくりの視点では、面で考えるだけではなく、幹線道路沿いと中通りに面したところでは取組に違いが出るなどが想定されるかと思えます。そのように、アクションレイヤーを重ねていくことにより、特定の場所でどのようなことに配慮してまちづくりを進めていけばいいのか、よりきめ細やかに示せるようになるのではないかという狙いを持っております。

この構造を踏まえた上で、右の図に、ベースレイヤーとなる骨格構造の案をお示しています。四つの骨格軸と一つの展開軸、二つの交流拠点は、現行計画から変更しないことと考えております。その上で、骨格軸の端でもある中島公園駅と大通公園西を、まちづくりを重点的に展開し、新たな活動交流を育む展開拠点として新たに追加したいと考えております。これら構造の要素及び骨格構造案を論点3として、ご意見をいただきたいと思えます。

説明は以上となります。よろしく願いいたします。

3. 意見交換

○村木座長

それでは、ここから意見交換に移ります。

今日、事務局から提示された論点は3点ですけれども、これは大体30分ずつ議論してほしいとされています。うまく切り分けて議論できるのかなという感じもするのですが、取りあえず、論点1の計画構成案についてのご意見をお願いします。発言される時は、机上のマイクをお使いいただけますと幸いです。

それでは、論点1について、ご意見がある方はいらっしゃいますか。では、お考えいただく間に、私から一つご意見を申し上げます。

論点1と論点3に両方に関わることですが、16ページの計画対象区域でひし形が書かれていて、次の17ページに私が結構やらせていただいた都心エネルギーマスタープランの図柄が出ています。この最後の論点3と関係してくるのですが、二つの計画を統合するという事は、骨格構造をどうするか、どのように計画に記載するかがすごく大事な話になってくると思っています。

都心エネルギーマスタープランは数値目標を入れていて、二酸化炭素の排出量をどうするかを数字で取って、それを評価していくということをやっているのですが、このひし形で書かれたときに、これがどの区域かが明確になっていないと、すごく数字が取りにくいということがあります。計画を統合することによる課題点をもう少し明確にしなければいけなくて、ゾーンという緩やかに提示する形でやっていくと、目標値の達成状況や何をやっていけばいいのか、都心のエネルギーのネットワーク等を考えた際に区域は非常に大事になってくるので、そこが気になったところでした。これは論点3にも関連しますが、一応、そのようなことを論点1で気になったので、申し上げておきます。

ほかに、何かお気づきのことがありましたら、ぜひ伺いたいと思いますが、いかがでしょうか。

○小篠委員

今の村木座長のお話に関連づけて、都心まちづくり計画のひし形となっているところをどうしてこうしたかということですが、都心自体の動きを明確に区切ってやると、その後の発展性を阻害する要因になるのではないかということで、むしろひし形にして緩く束ねていたと私は理解してしまっていて、それを担保できるような感じで都心まちづくり計画はつくられています。

一方で、おっしゃるとおり、きちんとしたゾーンを決めていかないと、エネルギーの削減効果が数値的に出せないのはごもっともな話です。ですから、その辺は痛しかゆしという状況にあると思います。

議論しなければいけないのは、では、エネルギーのほうでここをテリトリーにしますと明確にしたときに、それが開発とリンクし過ぎてしまって、ここまでが都心だよというふうに強く打ち出されてしまうと、その境界線の内側と外側で強く出てしまうおそれがある

ということで、果たしてよろしいかどうかの議論が必要になってくると思います。

○村木座長

ほかはいかがでしょうか。

○小篠委員

論点がなかなか切り離せないので、論点2についてもパイロット的に申し上げます。

22ページで目標を分けているのですが、例えば、目標1と目標2が割と都心まちづくり計画でヒットしやすい項目で、目標3が都心エネルギーマスタープランでヒットしやすい項目かと思います。

課題と目標を関係づけているツールですが、太い線と点線があります。先ほどは物理的な目標の構造の話をしたわけですが、目標自体も太い線でリンクしてこない、例えば、都心まちづくり計画と都心エネルギーマスタープランの話は関係してこないのではないかと思ったのです。

両方の目標を解決するためにこれを解かなければいけないという課題が見えてきているほうが計画としては何をしなければいけないのかがはっきりすると思います。ですから、ピンク色と黄色と青色の太い線がこの課題を解くことによってかなり関係づけて解決できるというか、関係させて考えないと駄目だねというところがあるかどうかこれで見えてきたほうがいいと思います。この辺だろうというところでやられていると思いますけれども、もう少し積極的に目標とリンクさせることがあってもいいと思いました。

○村木座長

これは、こういうふうに関係するだろうという想定で、そこまで考えるのはこれからなのかなとご意見を聞きながら思ったところです。

皆さん、ほかにご意見はいかがでしょうか。

○池ノ上委員

私も今の小篠委員の話に近いのかもしれないですが、19ページに都心まちづくりの課題が出てきていて、その背景として、これまでの計画の振り返り、社会経済情勢の変化、市民・来街者の意向、検討部会の意向が文字として書かれているのですが、私自身の理解力の問題かもしれないのですが、このロジックがよく分からなくて、突然、唐突にまちづくりの課題というものが抽出されている気がします。その辺りのロジックをもう少し整理しておかないと、なぜこの課題に取り組まないといけないのかがこの議論の中でしっかりこないと思っています。

その上で、これまた次の論点とその次の論点かもしれないですが、私がこの検討会の中でずっと確認したいと思っていたことですが、札幌市の市域全体と都心の関係をどう位置づけた上でこの都心まちづくりを進めようとしているのかというところをお聞きしたいと思っています。

この骨格軸の話にもつながると思うのですが、骨格軸という考え方自体、従前からずっと使われていると思うのですが、これからはなぜ必要なのか。従前は都心を核にし

ながら、いわゆるグレーター・札幌みたいなものをつくってきたために必要な構造だったと思うのです。これからもグレーター・札幌を続けていくのか、それは人口増加、社会の拡大、経済の拡大みたいなことを前提にしないとなかなか起きない問題だと思うのですけれども、都心以外の札幌の市域はどうしていこうとしているか、それに対して都心はどういう役割なのかを教えていただけたらと思っています。

ついでに質問をさせていただくと、市民と来街者という言葉があったのですが、市民は誰なのかということです。いわゆる夜間人口というか、夜間に働いている人がいるかもしれないのですが、いわゆる生活者なのか、それとも、昼間人口のことを指しているのか。来街者も、観光客なのか、働きに来ている人なのか、どういう人なのか、もう少しライフスタイルの視点で因数分解しないと、都市というのはなかなか把握できないのではないかと思いましたので、教えていただけたらと思います。

○村木座長

今のご質問について、事務局からお答えいただけますか。

○事務局（伊関都心まちづくり課長）

まず、1点目の市域全体と都心との関係につきましては、まさに、札幌市全体のまちづくり戦略ビジョンの中でも示されていたり、また、今、議論をされております都市計画マスタープランの中でも、札幌市全体の中での都心の位置づけでしたり、地域交流拠点といったものとの位置づけを示していきながら、都心の役割というものも示されていくことになろうかなと考えております。今、ちょうどその検討を同時並行で進めておりますので、その中で示していきながら、皆様にもお示しをしていくことになろうかと思っています。引き続き、札幌市の中で高次都市機能が集まったり、多くの交通結節点が集まったりする重要な場所だと考えておりますので、その都心をしっかりと発展させていくために、この都心まちづくり計画をつくり、まちづくりを進めていくべきではないかと考えております。

2点目の市民とは誰か、来街者とは誰かというお話ですが、まさに事務局の中で議論する中で、そのターゲットを誰と位置づけて、そのターゲットに対してどういう手を打っていくのか、第1回目の中でも観光客の視点ですとか様々ご指摘をいただきましたので、その辺りは具体の施策の中でもしっかりと考えながら対応していきたいと考えております。まさに、市民という中で、住民の方もいらっしゃいますし、ワーカーとしてこの都心に集まってくる方もいらっしゃいます。それは札幌市の方もそうですし、周辺の地域の方々もいらっしゃるかと思います。また、来街者という中では、観光客もそうですし、ビジネス等でいらっしゃる方もそうですし、観光客の中にも国内、国内、様々いらっしゃいますので、そういった方々をまさに因数分解しながら考えていく必要があるかと思っています。

○池ノ上委員

では、最初の質問に対しては、現時点では決まっていないのですか。決まらないけれども、従前からの計画の理念、考え方で進んでいこうということですか。エリア的にも発展

というのは何を指しているのかということもあるのですけれども、エリア的にも拡大していくというところを前提として議論すればいいということですか。

○事務局（伊関都心まちづくり課長）

私の説明が不足しておりました。

まず、都心の位置づけにつきまして、札幌市全体のまちづくり戦略ビジョンの中で、都市の構造につきましても一定程度示されております。その中で、都心の位置づけというものも記載がございまして、まさに今回の計画の中で示されておりますひし型のエリアはまちづくり戦略ビジョンの中でも示されていますので、まちづくり戦略ビジョンの位置づけを踏まえながら、都市計画マスタープラン、都心まちづくり計画を位置づけていきたいと考えております。

○池ノ上委員

私はまちづくり戦略ビジョンを暗記していませんが、つまり、都心エリアはどのようなれば成功だとビジョンの中で考えているのですか。

○事務局（伊関都心まちづくり課長）

スライドで第1回の資料が出せばいいのですが、ご用意をしておらず、申し訳ございません。

17ページにも明確には出ておりませんが、前回の資料の中でもまちづくり戦略ビジョンのご紹介をさせていただいておりますので、後ほどお示しできればと思うのですけれども、まちづくり戦略ビジョンでの都心の目指す姿というのは、高次の都市機能が集積する都心、魅力的で潤いのある歩きたくなる都心が形成されること、新しい価値が生まれ続けること、高い環境性能と強靱性を兼ね備えた都心を形成することという四つが主に示されておりますので、その目指す姿を具現化するために都心まちづくり計画を具体的に検討していきたいと考えております。

○村木座長

今の池ノ上委員のご指摘で、19ページのこれからの都心まちづくりの課題に出てきた課題はこれで十分なのか、この課題はどうやって出てきたのかという話があったのですが、恐らく、これに追加して検討すべき課題があると後ろの中にそれが出てくるということですね。そうすると、ここはもう少し足りないものがあるのではないかという話があったとしてもよさそうな気がしました。

ぱっと見たときに、とっさに思いつくのは、DXはあるけれども、GXがないとか、今、GXはすごく言われていることなので、そういうものもあったような気がしますし、これについても論点1ということで何かお気づきのことがあればお願いします。

○小篠委員

今の池ノ上委員と村木座長のお話を聞いていて、19ページにも書いてあるのですが、池ノ上委員が言っていたことを僕なりに解釈すると、都心まちづくり計画の構造でやってきたことが、これから先20年間も続けられるのかどうかという議論がなくてもいいのか

という話だと思って聞いていました。

19ページに「現行計画のふりかえり」と書いてあるので、それがこの課題のところに書かれているのか、書かれてないのかがあまりよく分からないというところだと思います。

軸とエリアという形で考えてきた都心のまちづくりを一回フラットに評価してみると、例えば、ここのエリアでは、こういう開発を先導し、誘導することができたし、コントロールすることができたよね、あるいは、こっちからだとかこの10年ぐらいではあまりうまくいけているかどうかというところがあるねというフラットな評価があった上で課題が抽出されてもいいと思いますし、むしろ、そのほうが分かりやすいのではないかとこのところがあると思って聞いていました。

○村木座長

しっかり評価した上でやらないと課題もなかなか見えにくいということだと思います。ほかにご意見はございませんか。

○内川委員

同じ19ページを見ていて、四角の中にこれからの都心まちづくりの課題と書いてあるのですが、課題というか、取組としか読めないなと思ったところです。一つ一つの枠の中にもこれまでの取組と今後の方向性と書いてあるのですが、当然ながら、これまでの取組が書かれていないものや今回新しく出たものもあって、これだと、それぞれの課題と、さらに細かな課題が見だし切れていないなと思ったので、これまでやってきたものに関しては、それを深めるための課題が何なのかということや、今まで手がけられていなかったものに関しては札幌の現状の課題がもう少し細かく分類できると分かりやすいと思いました。

○村木座長

ほかにございませんか。

○池田委員

論点1、論点2、論点3を分けてやるのは、進め方として不可能かなという印象も受けながらお話しさせていただきます。

まず一つに、13ページの都心まちづくりの理念は、恐らく何回も議論されていると思うのですが、この上にある人の顔が見えないのです。むしろ、さっき皆さんがおっしゃったように、どういうものが人々が望んでいることなのか、この上のどこかに書いてあると思うのですが、それが分からないので、教えていただきたいと思うのが1点です。

また、21ページで、ここにある「世界が憧れ、市民が誇れる、札幌・北海道の都心」も恐らく議論されていると思うのですが、世界が憧れる、市民が誇れるというのはどんな分野においてなのかということが見えてくると、先ほど質問があったように、まちづくりがフォーカスされてくるのではないかとこの印象を持ちます。

例えば、食で言うと、最近、ガストロノミーという視点がありまして、これは世界の中

で札幌が近郊に農業のエリアがあって、まだ土壌汚染がされていない、そこの作物を使った食文化をつくるとすると、それは都心とまち全体でどういう関係になるかという議論もあるかと思うのですけれども、そんなようなことを議論することによって、これはまちに取り入れてみようとなると思うのですが、その辺の議論をどこでしているのかということの一つ知りたいです。

同じように、スペインに行ったときに、ニューヨークのグッゲンハイムミュージアムの分館がビルバオにあって、あそこは100万人ぐらいのお客様が訪れるということで、やはり市民の芸術に対する思いが非常に根づいていったと。そういうことと、その根底にあることをどう捉えて取り組んでいけるかということをもっと情報として知りたいし、世界にはこんな事例があったよとか日本でこんな事例があったよというものを言い出すことによって、この検討会はもう少し違った側面も見えてくるのではないかと思います。

今回、札幌でのオリンピックがなくなりました。考えてみると、スポーツの価値といったものを教育の中でも伝え合っていく、それが醸成されてスポーツが盛んなまち、それがオリンピックにつながっていく、そんな考え方があると思うのですが、そういったものをこの中の議論の中でどうやって入れていくかについて、これは座長にもご意見を聞きたいと思います。

○村木座長

最初の13ページの上の図について、事務局からお答えいただけますか。

○事務局（伊関都心まちづくり課長）

こちらの理念や、13ページの構造に関して人の顔が見えない、どういった方々が望んでいるのかというご質問だったと認識しております。

先ほど池ノ上委員からもお話がありましたとおり、都心に関わる様々な関係者、非常に多くの関係者がいらっしゃると思います。それぞれ個々ばらばらにというのはこちらでもなかなか設定しにくいところもございいますので、関係する利害者の方々、来街者の方々を含め、多くの方々に対してこの都心のまちづくりがどういうものであるべきか、都心がどういうものであるべきかというものを包括的に示していきたいと考えております。

○村木座長

分かりにくいものを分かりやすくしていくために、いろいろ指摘しないといけないのだろうと今のご意見を聞きながら思ったところです。日本語が怪しい、主語がないから何を指しているのか分からないような、それとも関係するのかもしれませんが。

ほかにございませぬか。

○愛甲委員

私は、論点1のところ、違う視点からコメントいたします。

イメージ図の中の都心まちづくりのところ、成果指標の設定が出てきます。それから、次につくる中間アクションプログラムのところには取組ごとの活動指標というものが出てくるのですけれども、この計画の構成案を見ていて、どこでその指標をどう使うのがよ

く分からないところがあります。これは、先ほどから出ている目標との関係、課題に対して今回つくられる都心まちづくりの計画自体がどう対応していくかということにどう評価していくかが大事なところだと思うのです。設定するのであれば、その設定したものをどう使うかというのが構造、構成のイメージだったり、その章の章立ての中に入っていないと理解できないと思います。

それとも少し関係あるのですけれども、先ほどから話が出ている19ページのまちづくりの課題について、これは前回の資料を見ながら見ていたのですけれども、先ほども指摘ありましたが、確かにこれは取組が書いてあるだけで、ここでいきなり取組を書きしまうと、逆に、構造として次の中期のアクションプログラムだったり、第4章以降の内容との関係がよく分からなくなってしまいます。19ページには、前回の資料にあったような、これまでの計画、それから、その後の第1回検討会、部会で出てきた課題をきちんと書くべきではないかと思います。逆にそのほうが、それに対してどういう目標を掲げて、どういう理念を掲げますよという話につながりやすいのではないかと感じました。

○村木座長

指標をどうするかということと19ページの点は非常に大事なご指摘ですね。

ほかにご意見はございませんか。

○榎本委員

私から、19ページと14ページに関連してご意見させていただきたいと思います。

19ページの課題は、今、委員の方々からご意見いただいたところと同じですが、方針と課題は裏表なので、課題を書いたら方針っぽくなってしまふのは理解するのですけれども、仮に、この緑色のところを課題だと読むと、多分、札幌以外でも課題ですから、福岡に持って行ってこれを見ても、まあ、そうだなと思ってしまふと思います。それは、多分、日本全体の課題なので、そうなることは仕方ないと思いますが、札幌の都心部固有の課題が何なのかというのが分からない、伝わりにくいので、そこをもう少し具体的に記載をいただくと分かりやすくなると思いました。

それで、14ページに飛ぶのですが、今日の議論は理念と目標と構造のところまでだと思いますが、次回以降、具体的な方針とか戦略、取組みたいな議論になっていくときに、多分、課題の設定がそのまま取組の解像度につながっていくと思うので、ぜひその課題のところは、これまでの都心まちづくり計画の経緯と、村木座長からもありましたけれども、成果指標の達成度合いなど、いろいろなものを踏まえて記載しないと、この重点戦略がぼやけてしまではないかと思います。

札幌市役所の方とこれまでいろいろ議論をさせていただく中で、福岡をいろいろと比較対象にして課題を聞いていますと、多分、民間の担い手が福岡と比較してなかなか育っていない、行政が主導的になってしまうということが課題だと私は聞いているので、そういった具体的な課題が落とし込まれていくことが大事だなと。

官民の連携の課題に関しては、多分、第5章のところで書かれることかなと推察をして

いますが、第5章も非常に悩まれている、ここだけ枠だけで何も構成がないので、この中で官民がどういう連携をしていくのか、どういうプロジェクトをどういう体制や仕組みをもって動かしていくのかみたいなことも頭出しができておくとアクションプランにつながりやすいと思いました。

○村木座長

ほかはいかがでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○村木座長

そうすると、続いて、論点2を中心に、もちろんほかのところに波及してしまっても構いませんが、いかがでしょうか。

○三浦委員

私からは1点、まさにどこで話したらいいのかを考えながら皆さんのご意見を聞いていた中で、村木座長が先ほどおっしゃいました「DXはあるけれども、GXはない」というのは、私も非常に共感するところがございます。折しも、札幌市、北海道が金融・資産運用特区や国際戦略特区が認定された中で、今後GXを軸に札幌、北海道を発展させていくのだというところをちょうど打ち出されたところでもありますので、その辺り環境金融都市を目指すという意味で、人を呼び込むということもうたっておられるのであれば、特区指定された中で何をやっていくのかというものは追加的に考えなければいけないと思いながら拝聴しておりました。

○村木座長

ほかはいかがでしょうか。

○高野委員

21ページの目標というところですが、目標2の四季を通じて居心地がよく歩きたくなる都心を字面どおり読んだときに、私は、冬期の路面転倒事故のプロジェクトを20年ぐらいずっと続けているのですが、従来、一番正しい数字というのは救急車の搬送者数がありまして、年間1,000人ぐらいが運ばれる年が20年ぐらいずっと続いていたのですけれども、去年は1,800人を超えました。これは暖冬の影響もあったり、雪の降り方が異なるからということになっているのですけれども、実は、救急車で運ばれる方は氷山の本当の一角でして、整形外科に行くような打撲、通院を伴うような人だけで考えても、これは私の推計ですが、その数十倍いるのです。だから、大体1%以上の人が一冬に打撲程度以上のけがをしていて、通院の人も結構いるということです。

その中で、救急車のデータを区で分けると中央区が断トツに多いのです。そういうことは、インバウンドの方も多く、来街者の方も多いのです。だから、四季を通じて歩きたくなるというのをどういう意図で書いているかというのは、ウォーカブルの意味で歩きたくなるというのを単純に置き換えている感じもするのですが、本当に歩きたくなるという意味でいくと、真冬につるつる路面が発生したときでさえ歩きたくなるということを考える

と、そういう札幌ならではの状況としては、路面の転倒防止といいますか、砂まきや地下街の有効活用みたいなことも非常に重要な側面であると同時に、ウォーカブル的なイメージは、国交省も歩きたくなるというふうに安易に使っていますけれども、本当に歩きたくなるでいいのかどうか。これは自転車で行くのもそうですし、近くまで車で行ってそこを少しうごめくときだけ歩くというものも当然ウォーカブルですから、この横に書いてあるような市民・来街者が何度も訪れたくなるという意味合いが、ウォーカブルというか、ここでいう歩きたくなる都心というような意味だと思ふのです。

ですから、その辺の目標として、歩きたくなるというものをどういう意味合いで書くのか。それから、ユニバーサルやバリアフリーについて、冬季オリンピックは駄目になりましたけれども、もし冬季オリンピックが来ていたならば、冬期のバリアフリー、ユニバーサルデザインを札幌スタイルにするべきだという話があったと思ふのです。そういうものを含めて、歩きたくなるというところには、やはりバリアフリー、車椅子の方も訪れたくなるということが非常に重要だと思ふので、そういう読み込みができるのかどうかということが重要だと思ふます。

それから、隣に強靱化と脱炭素化が並んでいる面があつて、これはまちづくり戦略ビジョン的なものを踏襲してのことなのかもしれませんけれども、強靱化という意味でいくと、本当に大地震や台風といったようなこともあります。札幌では必ず年に数回は空港が止まり、JRは数回以上は止まるということで、市民もそうですけれども、来街者の方も大混乱です。インバウンドの方は、なかなか情報が伝わらないので、この前の新幹線が止まったときもインバウンドの方が一番大変な思いをされますね。そういうときに札幌に来られた方は、二度とこんなところに来ないとなるのです。

そういう意味で、強靱化というのは、本当に数十年に一度とか数年に一度ではない冬の交通機関の乱れというものも含めた形で考えていかなければいけないとすると、本当に脱炭素と並べていいのか、隣の居心地がよく安全・安心な何度も訪れたくなるというところで読み込むのがいいのか、私はそちらのほうがいいような気もして、この三つの対応関係というのが、脱炭素と強靱化が並ぶというのもどういうものかという感じがしまして、そこを何か歩きたくなる、何度も訪れたくなるということを取り込んで少し修正したほうがいいのではないかという感じがしました。

○村木座長

比較的耳当たりの良い言葉が並んでいると、その裏がどこまでのことを考えているかが分からないということですね。また、ここは、目標1、目標2、目標3と書かれていますが、これが最適な数なのかということもあるのかもしれないと思つたところです。ほかにございませんか。

○小篠委員

今の耳当たりというお話はまさにそのとおりですけれども、配付資料4のアンケート調査でいつも思ふのは、どうして札幌ならではの課題の話が出てこないのかと榎本委員から

話がありましたけれども、これを調べるためには、どれくらい居住しているのかという居住年数別でデータを取らないと分からないと思うのです。要は、定住が長い方、どこから定住と言うかどうかで、札幌は入れ替わりが非常に激しいまちだと私はある意味認識していますので、そういう方々のニーズも当然あって構わないのだけれども、定住をなさっている方もたくさんいらっしゃいます。先ほど高野委員から話があったけれども、定住している人は、ああいうことが起きることはみんな知っているのです。そのときにどうすればいいかということも大体分かっているのですけれども、それが知恵としてそんなに長く住んでいない人に伝わらないところがあるというような構造的な欠陥があります。でも、それは都市の特徴ですから、そういうところからきちんと掘り起こして、都市の課題、これは暮らしの課題と言ってもいいかもしれないですが、そういうものを抽出するという作業を今までやれてこなかったのではないかと、20年前に見ていたところはそこではなかったかもしれないので、今回、そののこのところを見てもいいのではないかとすごく思いました。

○村木座長

非常に大事なご指摘だったと思います。

論点2について、ほかにございませんか。

○井上委員

私どもも、ふだん、東京の丸の内のまちづくりを考える上で、まちづくりの目標をどうしていこうかということももう30年近く考えておまして、最初に掲げた目標に比べてだんだん変わっていくところもあります。それは何かというと、日本全体あるいは世界も含めて、その社会的課題として認識されることに対してまちがどういうふうに対応していくのか、そういう方向性を示すことが大事だろうと思います。

丸の内もほかからどんどん人が来てほしい、その中で交流が生まれて、それがそのまちの成長になっていくということを考えているので、そういったことにどういうふうに対応していますとか、みんなで一緒に考えましょうということと言えるようにしていくことが大事なのです。

私が東京から見ていると、札幌というまちは、これから日本の中で東京や大阪とはまた別の特色が絶対に出せる場所です。単純なことを言うと、北海道はなかなか35度にはなりませんけれども、東京は35度がもう当たり前になっていまして、居心地がよく歩きたくなるといっても、35度の中でなかなか歩きたくなれないのです。我々は、どちらかというと、そっちのほうが大変になってしまっているのだけれども、やはり北海道はまた別の観点から、そもそもその辺りの居心地がよいですね。ほかの季節、冬をどうするかといった違った観点もあると思います。

例えば、人口の規模も、東京はもう本当に1,000万人を軽く超えるわけですが、札幌市全体でも200万人程度の中でサイズもコンパクトだということもあると思います。ただ、その中でも、間違いなく北海道では人が一番集中するところですし、いろいろな人

が来るところですから、そこで何を打ち出していくのかということが大事かと思えます。

そういう意味では、例えば、木材を活用することによってそのGXをすごく打ち出しやすいのではないかと、それは、世界から見ても、東京とは違って札幌は特色が出しやすいと。まちの一つの個性として何を出せるか、先ほども何人かの方がおっしゃっていますけれども、そういうことを課題や目標のところに入れていくと、札幌らしいプランになると思っています。

我々も本当に少しずつ変えていっているのですけれども、それに対してどういう個性を出そうかというものはすごく難しいです。ただ、後から見ると、10年、20年たって動きそうなところに何を仕掛けていくかということが、結果的に、こういったことで何かプロジェクトをやってみて、こういう打ち出しができたよねとことになると思えますので、今、ターゲットエリアなど、これから動いていきそうなエリアがこのひし形の中にも幾つかあると思うのですが、そこに何を込めるのかということがあると思えます。

もう一つは、我々が丸の内ずっと考えてきたのですけれども、やはり丸の内だけでは解決し切れない課題があるのです。そのときにどうしていくかという、やはりその周りがあるエリアとどういうふうにするか、ある意味、役割分担というか、共存というか、全く同じまちを隣につくるのではなくて、隣は違うよさがある、そこへ行ったり来たりしていると、働きやすい、居心地がいいというふうになると。そうすると、札幌市でも、このひし形とその少し外側、札幌市自体はもっと広いと思えますので、そういったところがどういうふうに結び合ってひし形の部分がさらによくなるのか。このひし形で働いている人たちは、必ずしも、このひし形の中だけで暮らしているわけではなくて、外側とも行き来したりしているわけですから、そういったことも考えていくと、この都心と言いつつも、市全体とどういうふうに絡み合っていくのかといういいプランになるのではないかと思います。

○村木座長

大丸有地区のビジョンは10個でしたか。

○井上委員

九つです。

○村木座長

失礼しました。目標も幾つがいいのかというのは、今ここで3個出ていますけれども、これが最適かどうか分からないので、もう少し検討することも必要かもしれませんし、福岡でも結構出されていますよね。ほかはいかがでしょうか。

○榎本委員

20ページでコメントをさせていただきたいと思えます。多分、目標の数は幾つがいいということはこれからの議論ですが、今までの井上委員や村木座長のご意見は、僕もそう思っているのです、異論はないです。

明快で共有しやすいフレーズも確かに大事ですけれども、広島や福岡の経験でいくと、

フレーズ、言葉の力だけで共感して事業が動いていくということは、結構レアケースではないかと思っています。ですから、何かしらの工夫が必要だろうということが広島、福岡の経験から私と言えることです。

FDCという福岡地域戦略推進協議会を立ち上げたときは、シアトルのピュージェット・サウンド・リージョナル・カウンシル、ピュージェット湾地域評議会というところを参考にして戦略をつくっていきました。そこで何をやっていたかという、行政の方と地域のリーダーが集まって一緒にサミットという合宿をやるのです。そこで地域の課題を出して、その課題に応じた目標を立てて、その目標に対してボーイング、スターバックス、マイクロソフトみたいな会社が、私はここの目標にこれだけコミットしますと宣言して終わるのです。それを福岡でやろうと思いましたが、そこは形骸化してしまっていたのです。

こういうサミット形式のもの以外でも、多分、規制を準備するとかインセンティブを設計するなど、いろいろなやり方があると思うのですが、その大前提として、民間とか担い手の方々のニーズとかウォンツをちゃんと把握しておくということは最低限やっておかなければいけないと思っています。

ですから、これから札幌の都心部が動き出していくときに、今、面白いことをやっている方や事業を考えている方、東京から札幌に対して投資を考えている事業者の方など、多分、いろいろな担い手がいらっやると思うので、どういったところにニーズやウォンツがあるのかをきちんと把握して、事業の種を少しでも多くつくっていただきたいと思っています。

その辺の仕組みは、先ほどの私のコメントとも関連しますけれども、そういう仕組みづくりを、次回以降、もう少し議論できるといいなと思います。

○村木座長

ほかはいかがでしょうか。

○池ノ上委員

21ページの目標1の多様なひと・もの・ことが集まり新たな産業・文化・交流がうまれる都心は、先ほどから皆さんがおっしゃっているとおり心地よい言葉ですが、一方で、札幌の都心部の現状を考えると、いわゆる都市問題として全国で考えられたインナーシティ問題みたいなものがかかなり激しく起こりつつあると思うのです。いわゆる投資活動が大きく進んでいて、当然、不動産の価値が上がっていく中で、生活者やコミュニティーがなくなっていくという問題がすごく大きいかなと思っています。

その解決策かどうかは分からないのですが、これも全国的な動きの一つでしょうけれども、札幌では、タワーマンションを建てる。しかし、タワーマンションも既に供給過多になっていて非居住の箱が増えているという話が報道でもあったと思います。

ですから、多様な人がいなくなって行って、結局、ある一定の層の人たちしか入ってこられない、それはもう札幌市ではないレベルの不動産の売買が起こっていたり、あるい

は、観光客というレベルでしか入ってこないような都心というものが、この目標1を達成できるのかというところに危惧を覚えています。

このひし形の中で全て同じ方法で実現するというのは難しいと思うのですが、このひし形の地区の中にも、いろいろな特性を持った地区が混在していると思いますので、その辺りのそれぞれの地区の特性をもう少し丁寧に読み取った上で、この下の方法論かもしれないですが、その辺りの設定の議論ができるといいかなと思っています。

つい先週末に創成東で頓宮のお祭りがありましたが、あれも地域のコミュニティーがみこしの再生をしたり新しいランウェイというイベントを再生したりするような取組をしています。二条市場もそうですが、このまま放っておくと、多分、あの辺は全部なくなってしまうかなという危惧はありますので、その辺りに対して、どう実現することで目標1が達成されるのかというところで、もう少し具体的な方策を考えなければいけないと思っています。

○村木座長

分析をちゃんとした上で、考えてするという事ですね。ほかにご意見はございませんか。

○池田委員

前に、榎本委員からスタートアップエコシステムということをお教えいただきまして、自分なりにいろいろ研究してみました。実は、このことは、恐らく札幌の経済を強くしていく一つの要素になっていくのではないかなと思うのです。ですから、経済をどう強くしていくかということをおこの地域に書き加えていくことはとても大事ではないかと私は思っています。

どうかすると、私から見ると文化的で、先ほどの憧れるなどという言葉もいいのですが、一般の人たちもびんとくるような言葉が必要ですし、特に経済については皆さん関心があることだと思いますので、ぜひそういうことを入れてもらいたいと考えております。

実感として、私は、物産協会の会長をやっている、今、ポートランドやシアトルにある宇和島屋というところと5年前から北海道物産展みたいなものを行っているのですが、これが始まると、年に何回か行き来があるのです。経済というものは本当に行き来がある物すごく強いものを持っているなど実感したのです。その前までは、5年に一遍とかの周年行事だけだったのですが、今は、その経済を通して頻繁に行き来ができていますので、これはお互いにやはり経済の強さが積み重なっていくのではないかなと思います。

その中で、例えば、福岡は、アジアを抱えていまして、非常に経済が強いのです。だから、支店が集まる、人も集まる、投資も集まるということだと思うのです。札幌は北のほうなので、その背景があまりありませんけれども、でも、スタートアップという色を添えることによって企業にたくさん来ていただけるはずだと思います。それは確信できます。

そういったことを、文化もありますけれども、このまちづくりの中でしっかりと基本的

なものとして入れることが大事ではないかなということ、ぜひお願いできればと思います。

○村木座長

宇和島屋は、私もポートランドにいたときは大分活用させていただきました。今おっしゃったようなアイデアで経済をどうやって入れていくのかというのは、確かに、もう少し市民目線、市民のためのというものが非常に多くて、どうやって経済を活性化させていくのかという視点がもう少し入るといいのかなと思いました。ほかはいかがでしょうか。

○鹿島委員（代理）

私は、今回、初めてではありますが、皆さんのお話を伺っていて、いろいろ思うところもあって、ご意見させていただきます。

私は、実は、4月に北海道支店に来たばかりでございます。その前が日本橋におりまして、三井不動産のライフサイエンス・イノベーション推進部、まさに日本橋で新しい産業を立ち上げる、エコシステムを構築していくのだという部署におりました。実は、その前が九州支店、福岡におりまして、福岡のまちづくりにも取り組んでいるというところで、今回、この札幌市の都心のまちづくりは、個人的にも非常に興味深く見ております。

そういった中で、先ほどから課題を上げられていて、私もまさにそのとおりだと思っるところもございます。やはり、札幌ならではの課題というところを明確に抽出、はっきりとすべきというのは一つあるかと思えます。

一方で、逆に、札幌ならではの魅力もしっかりと認識すべきかと思っております。例えば、生活面でいきますと、福岡と札幌の両方に住んでみて、非常にすばらしい都市、両方とも住みやすいまちであるのは間違いないです。それはなぜかという、職場もある、生活環境も非常に優れている、おいしいものもある、すぐ近くに観光するところもあるといったようなところは共通していると思うのですが、札幌と福岡を比べますと、先ほど井上委員からもありましたが、気候の面では、私は、今回、夏を過ごしてみて、圧倒的に過ごしやすさというものを感じております。

まだ冬のつらさは経験していないのですが、恐らく、冬も課題はありながらも、例えば、観光客においては夏と冬はそれぞれ異なった目的でいらっしゃると思います。冬は冬ならではの空港のアクセスの問題もあるかと思うのですが、そこら辺はしっかり課題として認識して、どうしていくのかというところを考えていくべきかと思えます。

新産業創出のところでいきますと、一番大事なのはスタートアップの育成かと思うのですが、では、何に軸を置いてやっていくのかというところが一つ大きなところかと思っております。

我々が取り組んだ日本橋においては、もともと日本橋は江戸時代に薬問屋が集中していたということで、大手の製薬会社の本社が日本橋に集中しているところからライフサイエンスという発想を得まして、日本橋でライフサイエンスの新産業を創造していくのだということで始めまして、研究機関、大学、大手企業を巻き込んで、スタートアップエ

システム構築に取り組んでおります。

おかげさまで、2016年にLINK-Jというコミュニケーションを促進するエコシステム構築する組織を起ち上げたのですが、現在、法人、大企業など、800名を超えるような会員組織で大きく育ってきておいて、少しずつライフサイエンスの新産業、世界に先行するような新産業を育てていくことに少しずつ寄与できているかと思えます。

そういった中で、北海道、札幌に目を向けていくと、スタートアップの育成は非常に重要なことだと思いますが、何でスタートアップをやっていくのか、何の産業が北海道、札幌にとって強みなのかというところをしっかりと理解した上で、スタートアップ支援、エコシステムの構築に取り組んでいくことが大事ではないかと考えております。

○村木座長

やはり、産業をどうやって入れていくかも大事だということですね。ほかはいかがでしょうか。

○後藤委員

また論点2に話が戻りますけれども、先ほど池ノ上委員が言われた21ページの目標1の新産業や投資家事業等に注力ばかりしていくと、一方で、都心が住んでいる人にとっての魅力が落ちていくのではないかということに大変共感いたしました。

私は、渋谷の仕事を割と長くやっています、渋谷はここ15年から20年ぐらいで再開発が大分進んで、大変な投資が集まっているわけです。企業に勤めるワーカーの昼間の人口は物すごく増えていますが、それによって割と昔から住んでいる夜間人口、居住人口の人たちがちょっと住みにくくなっているというのは、私は仕事場のそばに住むのがいいなと思って15年ぐらい住んでいたのですが、どんどん住みにくくなっていきまして、去年、ついに引っ越してしまいました。

もちろん、両面あって、昔のままの古いまちがいいのかといったらそうではなくて、やはり高度利用土地の部分と、それを支える周辺の飲み屋も含めた昔ながらの機能と、それを両立していくということが大事だなとひしひしと感じているところであります。

今回、この理念とか目標の段階ではこれぐらいの書き方になると思うのですがけれども、次回以降、第4章とか第5章で、それぞれの施策やアクションプランを考えたときには、そういう細かく拾っていくところもちゃんと反映していかれるといいのだろうという感想を持ちました。

また、今日も冒頭の説明で軸やエリアから外れた部分が大事であるということも問題提起されていましたが、軸や拠点から少し外れたところにこそ、そういう都市の魅力というのがもしかしたら残ってしまうかもしれないので、ぜひその視点も持ちながら、次回以降、深めていければいいと思いました。

○村木座長

ほかに、論点2で言いたいことがある方はいらっしゃいませんか。

○愛甲委員

論点2の21ページの図の目標1、目標2、目標3はいいとしても、その間を結んでいる線と、線のところについているコメントの根拠が何を言っているのかが分かりにくいという単純な感想です。

本当にそれぞれの目標達成されることによってこれが起きるといえることが言いたいのか、目標を達成するために必要なことを言いたいのか、何を根拠にこんなことを言っているのかがよく分かりません。

○村木座長

論点2のまちづくりの目標については、今日のご意見がすごくたくさん出たので、各目標を結んでいることの意味や、ここに書かれていることが一体何を指しているのか、そして、目標というのが本当に三つなのか、いろいろ言われたことを考えつつ、修正を図っていただくことが大事かと思えます。ほかはいかがですか。

○渡邊委員

私は、商工会議所の中の都市・交通委員会の中で同じ議論をずっと以前からしているわけですが、今日は大変勉強になりましたし、私たちの内容としては、単純に言うと、人が求める都市づくりというものは、安心して住めて、環境に優しいまちづくりというものが基本になっています。それも、現在から将来を考えるのではなくて、人口減少はどうしても避けられませんし、例えば自動運転にしても交通関係がドラスティックに変わっていくという中では、ある意味、将来的にはもちろんコンパクトシティということを考えざるを得ないと。まだ札幌はいいほうですけれども、郡部においてはなおさらに酷くて、札幌の都市交通を考えると、郡部の人たちの関係性も考えていかないと、札幌だけの議論ではなかなか難しいのではないかという話が出ておりました。

コンパクトシティというとネガティブに捉えがちですけれども、効率的な社会にしないとエコにならないところもございまして、除雪の問題も含めて、まちづくりにとってそういう視点を加味したものをぜひ一部取り入れていただきたいと思っております。

○村木座長

都心に来る人がどこから来るのかも踏まえて、都心の機能と外との関係をどうするのかということですね。ほかにありますか。

(「なし」と発言する者あり)

○村木座長

よろしければ、論点3も含めてご意見をいただきたいと思えます。ひし形の都市構造図が出てきましたが、ご意見はいかがでしょう。

○片山委員

骨格から中島公園が出ていて資源として議論されないことが大変もったいないと前から感じています。

中島公園は、観光の起点でもあり、市民生活の起点でもあり、災害対策の起点でもあります。目的1に対しては、K i t a r a、豊平館、文学館、体育館、神社三つ、まさに集

まりたくなる目的地だと思います。目的2に対しては、このにぎわいの軸の終点として歩く目的地になっているので、地下鉄の中島公園駅ではなく、中島公園があるから人はこのにぎわいの軸に沿って歩くのだと思うのです。目的3に対しては、災害リスクに対してはまさに災害時に機能していると言えます。

大通公園もひし形の中にあるのですが、大通公園とは違う回遊式庭園が都心にあるということは、海外から来る人に対しても、まさに札幌市民が誇れる社会資源だと言えると思います。

さらには、札幌らしさがないのではないかという議論が上がっていたと思うのですけれども、冬の公園とか雪の中のまち歩きということを生かす、それらにどういう課題があるかということ掘り下げることによって、札幌らしい都心が浮かび上がると思うのです。これはマスタープランのひし形なので、すぐには変えられないと思うのですけれども、ここを見直すような議論をこの場でできていくといいのではないかと感じました。

○村木座長

ひし形はあるけれども、その外側に出ているところに都心を支える非常に大事な機能がある、そうすると、その書き方とか位置づけというものをどうしていくのかということかなと思いました。ほかにございませんか。

○井上委員

ほぼ同じごとを申し上げようと思っていまして、ひし形のところと中島公園を大通の西を今度どうやって位置づけていくのかというのは大事なことかと思っています。

私は、最初のほうで村木座長から少しお話があった低炭素の環境のマスタープランは、ほぼほぼこのひし形をカバーしているのですが、どちらかというと、この図でいうと左側の下側がエリアには入っていないというところで、本当にここが札幌都心にとって重要な役割を果たすのであれば、多分、こういったところも含めてCO₂に関して考えていくことが必要になるのかなと思っています。

私は、細かい内容について把握していないので、その必要性がどうかということよりも、もし本当にそういう方向性があるのであれば、そこをどう含めていくのかということを少し議論したほうが良いと思います。もちろん、札幌の郊外には緑がたくさんあると思いますし、公園もここだけではなくてたくさんあると思うのですが、要するに、札幌の都心を訪れる人が比較的アクセスしやすいとか、例えば、都心の行動と、この公園がいろいろなイベントあるいは憩いという中で関係が強いということであれば、都心のまちづくりの中にこういう公園を入れるということはあることだと思います。単に緑があるというだけではなくて、やはり、そこでどういう行動が起きて、そこで人がどういう感情を得るかというのは一つ大事な札幌のまちの特徴にもなり得るかもしれないと思います。

最近、グリーンインフラという言葉もありますけれども、単に緑を増やせばいいのではなくて、その緑を活用して人がどう満足度を得るかといったところも含めて考えると、ここも積極的にそのエリアとしてウォッチしていく必要があると思います。

○村木座長

ほかはいかがでしょうか。

○島口委員

全般的なお話になりますけれども、新幹線が実際にこの都市にどう考えているのかが全く見えてこないのです。本当は、この新幹線に向けてどう対策していくのか、まちづくりをするのかというぐらいの論議をしなければいけないのです。と申しますのは、金沢でもそうですし、今、福井がそのような形になっておりますし、そういう新しい交通が生まれてくる、それを目指して不動産投資、ホテルも建設がいっぱい進んでいるわけです。そんなところの問題で、どうして新幹線を軽視するのかというのがよく分からないところがあります。実際に、その効果というものが実証されているのに、これに対して本当にどうやって対策をしなければいけないのかというのがこれからのまちづくりの最大の論点だと思っていますので、ぜひそういうところではきちんとお考えをするような形につなげていただきたいと思います。

それから、前回の発言の中で観光をもう少し考えてくれという話を申し上げました。ただ、きつともって皆さんが観光ということに対しての感覚的な話は分かるのですけれども、現実的な話はなかなか数字に出てきていないということがあります。ある人に言わせれば、札幌市の3割は観光関連消費ではないかと言われているのです。実際にそのぐらい重要なファクターであるのに、それを理解していないということであるならば、一回、皆さんに実際の観光の重要性ということで、皆さんにきちんと数字でお示しをするのが一番よろしいのではないかと思います。

また、歩きたくなる都市空間というお話がありましたけれども、この中で実際に重要なのは実は歩行速度です。実際に地下街や地下歩行空間と狸小路では速度が全然違うのです。

実は、消費マインドの中で必要な歩行速度というものがあまして、その中では、実際にどういう歩行速度を目指して設備を取っていくのかというのが重要な話で、こういうところはきっちりと考えて、ただ単に通やすいではなくて、どうやって速度を抑えて楽しめる空間をつくるのかということが大事だと思います。

また、四季というのですけれども、実は、北海道の半年は冬なのです。先ほど高野委員が言われた転倒という問題があります。皆さんもご承知の上だと思いますけれども、駅前通などは冬にロードヒーティングをしていますね。あれは、実は商業者が100%払っているのです。行政側からは、一部歩道の部分を除いて、一切お金は出ていないわけです。そういうことからすれば、民間が冬の安全な空間を維持しているということは十分理解をいただいて、そんな中で冬をどうするのかという話になります。

いろいろな方々に話を聞くのですけれども、どうしても夏のデザインで論議を進めるのですが、冬に実際にどういうふうにするのか、冬が半年あるのです。これをもう少し都市としてきちんと考える必要があると思います。

もう一つは、インフォメーションということで、実際にさっきの交通機関の問題、それから、観光客を含めて来街者に一番大事なのは天気予報でして、これから雨が降るのかどうなのか、これから荒れるのかどうなのかということは非常に大事なのです。都市の中の表現ということのインフォメーションをこのまちにどう表現を出しているのかということと大事なお話です。

一般的なお話ですが、ぜひその辺の論点をきちんとご理解いただきたいと思います。

○村木座長

冬も考えて骨格構造を位置づけるとどうなるのか、今、話を伺いながら思ったところでした。ほかにご意見はいかがでしょうか。

○池ノ上委員

まず、28ページの左側の構造の要素（案）ですが、先ほどから都市の魅力と産業の関係みたいな話があったと思うのですが、私の知り合いの経営学の先生に、経営学というのは意味と価値をどうマネジメントするかみたいな話を教えていただいています。札幌のまちづくり戦略ビジョンの策定に関わられた先生ですが、それが都市計画やまちづくりにも十分適用できると私は思っています。

先ほどから論点2のところでも議論されていたビジョンとか目標というのがいわゆる意味だろうと思います。なぜ人が来るのか、なぜ人が行動するのかということかなと思っています。一方で、来たことで得たいベネフィット、価値、得られるバリューが産業的なものにもつながってくると思っています。なので、その辺りの部分も考えた上でのレイヤーというものがつくられると、札幌の都市としての魅力と、それで得られるバリューというか、価値の部分がかうまくレイヤリングされるようなものにならないかと思っています。

右側の骨格構造（案）ですが、先ほど渡邊委員から郡部というお話があったと思うのですが、私自身は都心部から外側のエリアは全てなのかなと思うのですけれども、そういう部分とどうネットワークをするのかという構想が都心部の検討の中にも必要かと思っています。

一つよく有名なのは、デンマークのコペンハーゲンのフィンガープランがあると思うのですが、それを都心部の中でどう収めるのかというのが、札幌の都市構造上というか、都市空間の特性上、必要かと思っています。というのは、札幌は碁盤の目調なので、いわゆる幹線道路が全て都心の中に突き刺さっていていると思うのです。なので、さっきからウォークブルの話があると思うのですが、札幌は、大型バスも含めて、スピードを上げた車が幹線道路に突き刺さってくるので、歩きたくないのです。私も創成東に住んでいまして大学まで歩いていくのですけれども、とても怖い思いをしながら歩いています。運動不足になるので、歩きたいと思うのですが、あまり都心部のほうに向かって歩きたくなくて、結局、苗穂駅のほうに歩いていくというのが現状かと思っています。この状態を変えないと、外に出たくない。冬場の話もありましたけれども、なかなか歩いてまちを散策したいという発想にならないと思っています。

その中で、私は、都市型の適疎みたいな考え方が重要ななと思っています。小篠委員は東川町で適疎という考えで活動されていますけれども、それを札幌の中でも、いわゆる北海道らしい都市はどうあるべきなのかと考えるときの過疎ではない適疎をどう実現していくのかという議論が十分かと。それが先ほどから出ている大通公園をどうするのか、中島公園をどうするのか、創成川公園をどうするのか、それ以外の公開空地も含めて、空いた土地ではなくて、わざと開けることで適度な空間を持って、過ごしやすい空間をつくるのか、いわゆる交流空間をつくるということにつながっていくと思っています。

軸の話と空間の在り方の話を混ぜてお話をしたのですが、その辺りの考え方も検討していただければと思います。

○村木座長

ほかはいかがでしょうか。

○小篠委員

構造で、先ほど井上委員と池ノ上委員も話されていたけれども、グリーンインフラについて、ここでもふわっと書いてあるのですが、そろそろグリーンスペースかオープンスペース、公園を、この構造の中にきちんと位置づけるというのが議論を回収する話かと思っています。

その要素は、大通公園、中島公園、それから、植物園もそうでしょうし、ここで色を塗っていますけれども、道庁の赤れんが庁舎のところもそうでしょう。人が行くところですね。それから、これは議論が要るのかもしれませんが、北大のキャンパスの南側をどう入れていくのかというような話もあるでしょう。この新しい期間の間に子ども図書館ができます。子ども図書館には、平日、休日問わず人がたくさんやってくることもなってくると新しい人の流れができてくるので、そういう意味で、大学が持っているからということではなかなか同意を取りづらくて入れづらいという話が今まであったかもしれませんが、今はもう札幌市と北大は協定も結んでいますし、札幌市が運営する北大に建つ施設という形で物ができていくことになっていくので、そういう意味で違う局面が生まれてくる場所もあり、そこも入れることが可能になってきます。そういうことを入れることによって、札幌らしいということの一つに、全部ではないと思いますけれども、先ほどからの議論というものを構造図として考える骨格として回収できるかなと一つ思いました。

それを考えることによって、それが単純に開いているオープンスペースというものではなくて意味のあるオープンスペースだということ、都心に集中して密度を高めていくという作り方ではない作り方が札幌の中でできるというのが池ノ上委員が言われている都心型の適疎という形につながっていくと思っています。これも重要なキーワードになり得るのではないかと思います。

そういうことをすることによって、左側の構造の要素（案）というところで、エネルギーの視点と書いてありますが、そこに強靱化や安心・安全の話というものも入ってくるので、そのレイヤー間の関係性ですね。今はレイヤーをただ並べているだけなので、この

レイヤーとレイヤーがどうつながるのかを言えないと話になってこないと思うので、それをつくる必要があって、今みたいなロジックで言えば、その関係性は少しくつれていくと思っていますし、両方に関係する一つのポイントかと思って発言させていただきました。

○村木座長 レイヤーとレイヤー間の関係という観点で考えると、今日ご指摘があった22ページもそうですが、目標と個別の課題の関係性、太線と細線がどうだったのか、これが今のレイヤーとも同じようなことで、実は、あまりそれぞれが連携されていない状況なのかもしれないですね。そこをもう少し深掘りしていくことが必要かもしれないと思いました。ほかはいかがでしょうか。

○愛甲委員

今、グリーンやオープンスペースについて話が出たので、私からも構造の要素（案）について申し上げます。

レイヤーをいろいろ考えて骨格構造を考える中で、私の立場から言うと、自然環境の視点が欠けていると感じます。これは単に緑とか公園というだけではなくて、この区域内には河川もありますし、もちろん街路樹、公園というか、緑地があります。それらは野生動物のすみかにもなっていて、逆に言えば、場合によっては都心に対してリスクにもなりかねないものも中にあったりするわけで、その辺を都心のまちづくりを考える上で考慮に入れるという視点も大事なのだらうと思います。

もう一つは、気になっていた件で、左下のエリア、南西側のエリアは、どこからも全てのいろいろな計画からも抜けているし、ここに対して何の軸も拠点も入っていないエリアで、ずっとここは何も動きがないエリアとして放っておいていいのだらうかということが気になります。

第2次の都心まちづくり計画では、もう少し丸が薄野のほうにも広がっていてターゲットエリアとして書かれていて幾つか取組が書かれていたりするのですけれども、そこが全くすっぽりと白地のようになってしまうのは、都心まちづくり計画としていかがなものだらうとちょっと気になりました。

○村木座長

ほかにございませんか。

○高野委員

28ページの論点3に、レイヤーではないかもしれませんが、時間軸を導入すべきではないかと思います。

一つは、冬がレイヤーになるのかどうかは別にして、冬という時間、季節をそういった観点からやはりいろいろな面を検討するという発想が必要だと思います。

もう一つは、本当の時間軸で、過去については、点検、分析されていますけれども、将来という意味において、先ほど議論があった19ページのまちづくりの課題がほぼ現状の課題であって、例えば、10年、20年、30年、40年先を考えて、それを戻してきて考えるということも必要だと思うのです。例えば、交通の分野では必ず20年先の交通量

を予測してマスタープランをつくりましますけれども、交通量は相当程度減るのです。10%、20%ぐらいは減るわけです。減ったらどういうふうに空間に余裕ができたかという議論ができるわけです。都心まちづくり計画においても、将来、この20年計画で20年先を見ますね。だから、もっと先を見た上でフィードバックするというか、バックキャストイングしてもいいと思うのです。都心もかなり人口が減りますね。20年先でも減るでしょう。だから、そういう読み込みの中にあるのかどうかという意味で考えたときに、時間軸という視点が一番最後のところに欠けているような気がするのです。

先ほど、新幹線がちゃんと書かれていないのではないかというご指摘もありましたけれども、新幹線は10年ぐらいで来そうなところはありますので、そういう確実なものから人口の減少、あるいは、人口構成が変わるのか、札幌の位置づけはどうなるのか、かなり不確定要素が高いですけれども、そういうものを読み込んだ上で描くということが必要ではないかということを感じました。

○村木座長

エネルギーだと、絶対的に2050年にゼロにするにはということでバックキャストイングしてきましたが、まちづくりのほうは、できることとできないことがあると思いますけれども、書けることは一体何なのかということを考えていくことも大事かと思いました。ほかはいかがでしょうか。

○榎本委員

26ページ以降に関連計画と動向が⑤まで出ていますけれども、これが結構大事な図ではないかと思っています。

先ほど愛甲委員もありましたけれども、多分、自然の資源のマップがあると、この軸でいいのかという議論ができると思いますし、関連計画・動向⑤の新たなまちづくりがあるエリアに子ども図書館が入ってなかったり、何か主要プロジェクトや札幌都心部の資源など、いろいろなものが落とし込まれて、それは特性別にマップにしないとごちゃごちゃしてしまうと思うのですけれども、それを見比べることで、何も着手していないエリアが浮き彫りになったり、自然と何かこの軸ではないのではないかというのが議論できるのではないかと思うので、そういった図をもう少し精査して議論できるのではないかと思います。

あとは、先ほど後藤委員からもありましたけれども、いわゆる都心ではないところで起きている面白さみたいなことを拾うためにも、やはりマップできちんと議論したほうがいいのではないかと思います。

○村木座長

ほかはいかがですか。

○三浦委員

先ほど池田委員や鹿島委員のお話にもありましたが、産業の育成の中でスタートアップというのが一つキーワードになるのではないかという話で、まさに、こういう部分が人を

呼び込むという観点でも大事かと思えます。人を呼び込むという施策では観光も当然大事ですが、観光ですと1週間、1か月ですけれども、産業だともう少し長いスパンで札幌に居ていただけます。また、池田委員がおっしゃったように、ほかの地域との流動性といえますか、行き来が生まれるというのは非常に大事かと思えます。その辺りを市内中心部のどこのゾーンに持ってくるのかというものも機能配置のところで考えられるといいと思います。

私も札幌にはまだ1年ぐらいしか住んでいませんので、その部分の観点をどうしても持ってしまうのですけれども、混雑度の緩和という言い方もされますが、東京や大阪と比べると混雑度は全然まだまだというところもあります。一方で、先ほどの産業育成という意味で、例えばイノベーションハブ施設というものが全国あちこちに出ていると思いますけれども、そういった部分も場合によっては意図を持って集約させると。集約させるといって、民間での自発的な活動とはかけ離れてしまうのですけれども、誘導していくという観点が大事かと思えます。

北大も近くにある中で産学連携をどういう形で機能配置していくのか、もともとのゾーンの中でも札幌駅の近くとなる都心強化先導エリアというものを念頭に置かれていると思うのですけれども、一方で、支店経済という形で全国企業の支社が集まるのと同じところにするのか、あえて分けるのか、そういった部分で多様性のある産業が生まれてくるのではないかと考えております。

特に、先ほど申し上げたことの繰り返しになりますけれども、札幌市は、今後、GXで北海道、それから、日本、世界をリードしていくというところであれば、そういった新しい技術開発、水素周りですとかアンモニアも含めた機能開発の実証実験としての場の北海道、その中の重点としての札幌みたいな位置づけで発信して人を呼び込むという観点も大事なのかなと感じました。

都市構造というところから離れて恐縮ですけれども、人を呼び込むきっかけとしての産業という観点でコメントさせていただきました。

○村木座長

ほかにいかがですか。

○オブザーバー（草野）

今回、委員の先生のご意見を聞いているだけで非常に勉強になりました。どうもありがとうございました。

札幌開発建設部では、関連する都心部事業を実施する際に、いかに工夫してやっていくか、そのほかにも道路空間のにぎわいづくり、運用方法の工夫など、そういった社会実験を後押ししておりますので、こういうことでよりよい都心まちづくりに貢献していきたいと思っております。

資料について感じたことを少し述べさせていただきます。

目標として、歩きたくなるまちづくりとあるのですけれども、やはり資料を見定める

と、歩くこと、ウォーカブルが中心になっているかなと感じたところがございます。自動車以外のモビリティ、例えば、自転車はシェアリングサービスがある程度普及している状況かと個人的には思っていますし、また、電動キックボードといった比較的新しいモビリティも今はありますので、そういったものをどう活用していくかというのも議論として良いのでは、と思っております。

札幌の大半は冬ということもあって、議論した結果、なかなか難しいということになるかもしれませんが、次回以降、もう少し具体的な議論をする際に着目していただければと思っております。

○村木座長

ほかはよろしいでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○村木座長

予定の時間になっておりますけれども、今日の議論を受けて、事務局から何かございませんか。

○事務局（稲垣都心まちづくり推進室長）

非常にいろいろな角度からご指摘、アドバイスをいただいたと感じながら拝聴しておりました。

今日、答えを出せないことのほうが多いので、感想めいたコメントになりますが、やはり行政計画であり、かつ、今日は、計画全体のうちの上流部分といいますか、理念、目標までの話題でしたので、どうしても言葉の選択を含めて抽象度が高い資料になってしまい、委員の皆さんにも我々のイメージしているところが伝わり切れていないのかなと反省しておりました。

次回以降、具体的にどういったアクションが必要なのか、そして、それはなぜなのかということの話題を掘り下げていきますので、その際には、今日、複数ご指摘いただいた札幌らしさ、札幌ならではのという視点については、より認識して検討、掘り下げていきたいと思えます。成果指標などは今日の議論ではなくてその次以降ということで話題提供ができなかったのですけれども、最終的には、どんな成果指標を置き、そして、それをどういう形でPDCAを回していくかということは我々も問題意識を持っていますので、その辺につながるようなことも少し話題提供させていただきながら次回以降の議論を進めていきたいなと思っています。

加えて、冒頭に、これからのスケジュールも含めてお示ししておりますけれども、この全体の検討会に加えて二つのテーマでの部会も置いておりますので、そちらの議論と全体会の議論を結びつけていきながら、限られた時間の中ではありますが、我々はしっかりと議論を掘り下げていきたいと思っております。

○村木座長

ほかにご意見がなければ、これで本日の検討会を終了したいと思っておりますが、いかがで

しょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○村木座長

それでは、長時間にわたり、ありがとうございました。

進行を事務局にお返しいたします。

4. 閉 会

○事務局（伊関都心まちづくり課長）

村木座長、ありがとうございました。

また、皆様におかれましては、多くのご意見をいただきまして、誠にありがとうございました。

議事録につきましては、皆様に内容のご確認をいただいた上で、後日、ホームページにて公開させていただきます。

また、次回の検討会については、来年、令和7年2月の開催を予定しております。具体的な日程につきましては、現在、日程調整等をさせていただいておりますので、改めてご案内させていただきます。

また、次回検討会開催までの間に、部会を11月頃、1月頃に開催する予定でございますので、各部会の資料、議事録等につきましてもメール等で共有させていただきます。

本日は、以上で閉会させていただきます。

長時間、どうもありがとうございました。

以 上